おじさんズ通信

２０２２年３月号（Ｎｏ１６）
発行元：登別市新生町４丁目桃柿通
緑風舎
発行者：おじさんズ３号

「ひまわりの種を、入れておけ」

プーチンに殺されるロシア兵への警句

女性「あなたは誰」
（ロシア兵は「演習」と答えたようだ）
女性「演習ってなんのこと。ロシア人なの？」
ロシア兵　・・・・・
女性「ロシア人なの？」
ロシア兵「ええ」
女性「いったいここで何してるの」
ロシア兵「話をしてもどうにもならない」
女性「占領軍ね！　ファシスト！」
ロシア兵「△※〇～」
女性「私たちの地元に来て、いったいなんなの。なんで武器を持ってここに来たの」
ロシア兵「我々は・・・」
女性「この種を持っていきなさいよ。あんたがここで死んだ時、そこからヒマワリが生えるように」
ロシア兵「そうか、話をしてもどうにもならない。事態がこれ以上悪くしないようにしましょう。頼みます」

女性「私達がこれ以上事態を悪くするってどういうこと」
ロシア兵「事態がこれ以上悪くしないようにしましょう」
女性「あんたたちみんな、この種をポケットに入れてよ」
ロシア兵「△※〇～」
女性「種を持っていってよ。あんたたちは種を持ってここで死ぬんだから。私たちの土地にやって来て」
ロシア兵「分かった。聞くだけ聞きましたよ」
女性「分かってるの？　あんたたちは占領軍だ」
ロシア兵「分かった」
女性「あんたたちは敵だ」
ロシア兵「そうか」
女性「あんたたちは呪われている」
ロシア兵「そうか」
女性「そうだよ。ここまでだ。いいか、よく聞いて」
ロシア兵「事態がこれ以上悪くならないように」
女性「悪化しないようにって？　呼ばれてもいないのに、やって来たのは、あんたたちでしょう」

＊＊

以上のロシア兵とウクライナの女性との会話は、イギリスのメディアが撮影し２月２４日に公開した動画。場所はクリミア半島に近いウクライナ南部**ヘルソン州**のヘニチエスク。写真はそのひとコマです。

（撃つのなら撃て。言うべきことは言う）

ロシア兵だと分かっていて「お前は誰だ」と、決死の覚悟で銃を持った兵士に詰め寄るウクライナ女性の勇気と行動力には、胸を打たれます。

「お国（ロシア）の墓花、その種をポケットに入れておけ」という言葉は、「ここで、お前は無駄死にするのだ」という警句でもあります。一部報道でヒマワリはウクライナの国花とありますが、ロシアの国の花が正しいようです。間違っていたら、お許しを。ただ、生産量でウクライナはロシアに次いで世界２位とか。

「ポケットに種」の理由は、これか？

１９７０年公開のイタリア・フランス・ソ連・アメリカ合作の戦争映画「ひまわり」。懐かしむのは我々団塊世代か更に年上、あるいは映画マニアくらいかもしれませんが、それはさておき、あらすじの関連部分を、ブログ「居ながらシネマ」からも一部引用させていただき紹介します。

第二次大戦でロシア戦線に送られた新婚早々の若きイタリア兵士。戦争終結後、帰って来ないその夫を捜しにソ連に出掛けた妻が、一面に広がるヒマワリ畑に囲まれたイタリア兵の墓標を見て回る。そこに建つ記念碑にはロシア語でこう書かれていました。（写真はそのシーン）

「ファシストに殺されたイタリア兵士たち、ここに眠る」

ファシストとはムッソリーニ、あるいはヒトラーか。「君たちは、彼ら戦争指導者に殺されたのだ」と語っているようです。

しかし、碑に刻まれた「ナポリの息子よ。なぜ君はロシアの野に来たのか」（映画字幕）の一節が、皮肉にも７０年余の時を超えて甦り、書き変えられました。

「赤の広場の息子よ、呼ばれてもいないのに、なぜウクライナに来た」と。

ロシア兵に立ち向かったあの婦人は、こう言いたかったのかも。

「ここで死んでいくお前たちの墓標に、こう書かれるだろう、

『プーチンに殺されたロシア兵士、ここに眠る』

と。だからポケットに目印代わりになるヒマワリの種を入れておけ」。

映画公開から半世紀―。主演のソフィア・ローレンが夫の墓はないかと捜し歩くヒマワリ畑のロケ地もまた、**ヘルソン州**でした。１分、１秒でも早く戦闘が止み、多くの命が救われることを祈るばかりです。

<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<<·>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

「たった独りの引き揚げ隊」

石村 博子 著

「知里幸恵銀のしずく記念館」友の会通信「シロカニペ」No23 に、今年９月のフォーラムで室蘭出身のノンフィクション作家、石村博子さんが講演すると、告知がありました。そして、この４月に著書「ピｯカチカッポ（美しい島）―知里幸恵とアイヌ神謡集」が出版されることを知り、「横山むつみさんとの約束を、果たした。さすが」と、ちょっと我がコトのように喜びました。

幸恵の姪で記念館館長だったむつみさん。登別駅前の喫茶店を手伝っていたとき、ちょくちょく、手作りお菓子を買いに立ち寄ったのを思い出します。

「この辺に、きのう来た、お菓子屋さんがいなくてね」

（？　きのう来たお菓子屋？）

聴き間違いでした。「気の利いた、お菓子屋さんがない」でした。

その後、記念館へ取材に訪れた石村さんとむつみさんが連れだって来店。かつての職場の同僚が「高校時代のクラス仲間」と話していたので、簡単なあいさつを交わしましたが、さすが一言ひとことにルポルタージュ作家らしい沈着冷静な姿勢が垣間見られました。

さらに登別市立図書館から「文化講演会の講師にどなたか」と問われ、すぐに思い浮かんだのが石村さん。６年前の２０１６年２月、登別市民会館で「“その人”の物語を聴くということ」の演題で講演されましたが、最後に質問・感想のマイクを握ったむつみさんのひとことが耳に残りました。

「私の生きているうちに、何とか本に」

残念ながら、それから約半年後、むつみさんは旅立たれました。

「少年一人、千キロ避難」の報に

ウクライナ南部から列車など乗り継ぎ、11 歳の少年が一人でスロバキアにたどり着いたというニュースに、石村さんの著書「たった独りの引き揚げ隊　１０歳の少年、満州１０００キロを征く」を思い出しました。

父は日本人、母はコサック人の古賀正一（日本名）少年。ロシア名はビクトル・ニキートヴィッチ・ラーパルジン。戦後、格闘技サンボで名をはせたビクトル古賀と言った方が、年配者には耳なれた名前かと。

日本人の引き揚げ集団から「ロスケだ」と追い出され、ナイフ一本を頼りに終戦翌年の１９４６年、旧満州のハルビンから錦州まで千キロを歩き通し、日本にたどり着いたビクトル少年の実話は、先のウクライナの少年の逃避行と共通するものがありますが、それはいずれかの機会に。

石村さんのこの本を読み直して、改めて驚かされたのは巻末に掲載された参考文献の多さ。数えてみたら１２９冊にのぼりました。もう、これだけで、コツコツ史資料を読み解き、史実を積み上げ、組み立て、原稿のマス目を埋めていく果てしない労苦がうかがい知れます。

石村さんが講演する「知里幸恵フォーラム」は9月２４日（土）登別市民会館で、先着予約１５０人限定。参加希望者で友の会会員でない方は記念館（電話・FAX　0143−83−5666）までお問い合わせを。

薫風　烈風

▶「２０年も権力の座にいたら『大統領』とはいわない」との指摘に、隣の大国も４年前に憲法を変えて２期１０年だった主席の任期を撤廃したのを思い出した。周りはイエスマンばかり、反抗する奴は即、弾圧。独裁者として歴史に名を残すことも知らずに。力による支配、許せません。皆さん、お元気で～。